モンスターハンター×ハンターモンスター

クランク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
モンスターハンター×ハンターモンスター

【Ｎコード】
Ｎ８９４０Ｇ

【作者名】
クランク

【あらすじ】
狼少女アコと狼少年コーリン。彼らの狩り模様はいつも残酷で滑稽である。アコは肉に餓える火竜として育てられたコンプレックスに苛まれる。嘘をもって正義を成すことを夢見るコーリンは、いつの日か訪れる寓話の終わりを恐れている。ある日２人は、偽物好きの本物志向、剣術士アズサと出会い…。ダークコメディ系モンスターハンターＦＦ小説。

第０話：アプトノスハートはとてもおいしい（前書き）

警告

この小説には残酷な描写が多々含まれます。

苦手な方は御遠慮下さい。

この小説は「モンスターハンター」を下敷きにして創られたファンフィクション（ＦＦ）です。

第0話：アプトノスハートはとてもおいしい

私はハンターとして生きる運命だった。

父と母は私に「生きる」とは、つまりは「狩り」であると教えてくれた。

私の生まれて初めての狩りの事を思い出そう。

その日、父は仕留めた獲物を殺さずに持ち帰ってきた。

それまで父が狩り、母が捌いた肉塊を何の物かも分からずに食していた私にはその生き物が一体何なのか分かりもしなかった。

しかし、母は怯える私にただ「そいつを食べなさい」と示した。

父は口に咥えた生き物をゆっくりと私の前に離す。

腹に深手を負った4本足の生き物は、泣き喚き、暴れた。

あまりにひどく暴れるので、少し傷口から「中身」がだらり、と飛び出る。

そして私は直観した。なるほど、食べられそうだ、と。

私が欲しいのは真っ赤なお肉。ただそれだけ。他はいらない。

1歩目の前の食事に踏み出したら、もう私の食欲は止まらなかった。
きっとあの毛皮の下には私の食事がつまっている。
バタバタとのたうち回るそいつが一瞬傷口を私の方に曝け出したと同時に、鉤爪のように強張らせた右手、左手を腹に突っ込む。
私の手はあったかい肉の中でただただ奥の方を目指してまさぐった。
そして、一番おいしそうな部分を引き千切って両手を取りだした時、その生き物はもう動かなくなっていた。
私がビクビクと定期的な周期で跳ねる戦利品に口をつけているのを見て、父と母は満足気に私を見下ろす。

そのとき私は理解した。
「狩り」とは「殺す」ことなのだと。
それが「生きる」ことなのだと。
私は「狩りに生きる」ことを心に誓った。

第１話：ポポの生肉に関する欺罔（前書き）

少女には壮絶な生まれがある。
少女は「狩りに生きる」ことを父と母に教えられた。
生きるとはＫＩＬＬである。

第1話：ポポの生肉に関する欺罔

雪山を生肉で荷物をいっぱいにして登るのは、今日が初めてのことではない。

ズタ袋の中でベチョベチョと音を立てながら引きずられている肉の塊は、ついさきほどまでポポという4足歩行の獣だったものである。

やつらは鈍重で、怠け者だ。

あんなただ狩られるためだけに生まれ落ちたような生き物は、私は嫌いである。

「生きる」とは「狩る」ことなのである。

だから私は、隣りで同じようにズタ袋を引きずりながら、街で生肉を売り払った時の金勘定をしてニヤついている青年に提案した。

「ねぇコーリン。きっと雪山の中には小さい青色の鳥竜がいるでしょう？

あれを狩らない？こんなポポの肉じゃきっと街の人も満足しないよ。」

私の問いかけに対し、生肉の金勘定を取りやめてコーリンは話始める。

「いやポポの肉は素晴らしい。

お前は市場に行ったことがないから知らないだろうが、ポポの肉は非常に高値で取引されている。

日持ちもよく、味もいいからだ。

だからハンター達の格好の標的になる。普通こんな天候の好い日だったら、雪山はポポ目当てのハンター達で溢れているだろうさ。

今日来て良かったろ？アコ。」

「でもさっき狩り場には誰もいなかったわよね？

だからこれだけの量を狩れたんじゃない。」

私はズタ袋のせいで自分が身重になったことに対して少し不満であることを主張するため、少し歩をゆるめた。

「アコは聞いてないか？雪山にリオレウスが出たって噂。」

…そんな話、私は聞いてない。

リオレウスは本来もっと温かい場所に住んでいるはずだ。

だが、リオレイアの産卵の時期、つがいのために大量の狩りをしなければならないため、レウスは遠征を繰り返す。

それがごくごく稀にこの雪山にも及ぶことがある、というのは私しか知らない事であった。

しかし、それはつい最近までの話。

私はその事実を一昨日の晩餐の席でコーリンに話していた。

「そんな話全然聞いてなかった。なんで早く教えてくれなかったの！？」

私のレウス・レイアに対する特別な思いを知っているコーリンは、私が語気を強めたことに驚かなかった。

だが、彼は腹の立つことにうすら笑いをしている。

「嘘だからさ。」

「え？」

「空の王者リオレウスが雪山に出没した、なんてのは俺がついた真っ赤な嘘。

君がディナーで話してくれた次の日に俺が集会所で吹聴したんだ。

君の情報のおかげでずっと信憑性が上がったから、その日の晩にはギルド中に広まってたね。

だからポポを狩るような下位ハンターは、レウスを恐れて今日雪山に足を運ばなかったってわけ。

まぁ奴らはモノの売りさばき方を全くもって分かってないから、彼らが乱獲すれば市場価格が出鱈目に下がっちまう。

自分で自分の首を締めるようなハンターは、さっさとギルドからも締め出したほうがいいと思ってね。」

私は呆れた。また彼はくだらない嘘をついたのか。

今回のような利益のある嘘ならまだいいが、彼は普段からどうでもいい嘘ばかりついていた。

ギルドを通しての狩りに詳しくない私もその被害者の一人だ。

やれ、捕獲用麻酔玉をぶつけたモンスターは自分が思うがままにあやつれる、だの。

やれ、ギルドからの支給品専用アイテムは質がいいから使わずにとっておいた方がいい、だの。

やれ、クシャルダオラは風属性、だの。

彼の嘘に騙されて鞄いっぱいにこやし玉をクエストに持ち込んだこともあった。

「お前の鞄に入れると臭くなるから今回のお前の取り分はなしな」って言われて…、あれも彼が利する嘘だったか。

このやろう。

「で、今日のクエストの成功条件は何だったか覚えてるのか？」

「ドスギアノスの討伐、でしょう？」

当然報酬金目当てである。

少しでも楽で儲かるクエストを彼が選んだらしい。結局ギアノスを狩るのか、と思いつつ、彼にひとつ疑問を投げかける。

「さっきポポの肉を狩るのは高く売れるからだと言っていたけど、ギアノスの肉はどうなのよ？」

彼の表情が曇り、若干の沈黙が生まれる。

「お前、ギアノスの肉を食べたことがあるのか？」

「…分からない。」

「そうか…。ギアノスの肉は食べないんだ、人間は。

ランポスやフルフルや、リオレウスの肉もね。

食えるモンスターの方が少ないくらいだ。」

私はリオレウスの名前が出たことに少し動揺してしまった。

「じゃあさ。食べられるモンスターとそうでないモンスターの違いって何なのかな？

分かった！２本足か４本足かでしょう！？

足っておいしいからね♪多い方がいいよね。」

「そうかもしれないな。

あとお前、『クジラ』って知ってるか？

俺も見たことはないんだけれど、水の中に住んでるラオシャンロンよりもずっとでかい生き物らしいんだぜ。」

「知らないわ。えっと、嘘じゃないよね？」

「ああ、嘘じゃない。

でもな、クジラは人間よりもずっと頭のいい生き物らしくって、そいつを食べちゃいけないって力説する学者も多くいるんだ。

結構うまいと聞いてるんんだがな。

でも、頭の良さで食べられる生き物かどうかを判断するのはどうなんだろうな、アコ？」

コーリンは頭一つ下の私の顔をじっと見て、ニヤリと笑う。

「もしかして、私が頭悪いから食べられるんじゃないか、って思ったでしょ？」

彼のニヤリ笑いはとたんに哄笑に変わった。

「いつもお前は俺に騙されてばかりだからな。ごめんごめん。」

彼は全く反省した顔をしていない。

しかし、彼は何を思ったのか彼の顔は逆に真剣な表情に変わり、

静かに口を開いた。

「あとな、アコ。食べられる生き物かどうかを判断は、蹄が分かれているかどうか、って説もあるよ。

蹄が分かれている生き物は人間に食われるために神様が作ったんだぜ？」

私は「人間に食われるため」という言葉の意味をどう受け取ればいいのか分からなかった。

私は鈍重なポポを見て、奴らは狩られるために生まれた生き物だ、と思っていた。

しかし、それを神様という聞き慣れない言葉と関連付けるのはどうだろう。

コーリンが信仰に厚い村の生まれだということは知っている。

神様だとか精霊だとかいう概念を私に教えてくれたのも彼だった。

だけれども、現実主義者の彼が本当にその存在を信じているとはとても思えなかった。

「コーリン、それはさすがに嘘だよね？」

「ばれたか。そうだよ、神様なんていない。

適当に誰かが妄想した産物にすぎない。

人が食べていい生き物と悪い生き物を分けるなんて本来おかしいんだ。

うまいものなら食べる。まずけりゃ食べない。

それでいいじゃないか。」

そう言って彼は立ち止まった。

ドスギアノスがいるであろう狩り場はもうすぐそこである。

彼は自分の頬を両手で2回叩き、ついでに私の頬を張ろうとして、私はそれをさっと避けた。

コーリンは声を張り上げて言う。

「さぁ、俺達の狩りの始まりだ！気合入れていこうぜ！」

しかし、この時私はまだ先程の会話について考えていた。

なぜ私がギアノスの肉のことを聞いた時、彼の表情が曇ったのか。

彼は私の方をじっと見て、食べられるか否かを考えていた。その結論はどうなったのか。

突然に神様という言葉を、食べるために生まれてきた生き物と関連付けた意味とは。

そのすべては、人がギアノスを食べない、いや、肉食モンスターを食べない極めて現実的な理由を合わせて考えることで疑問は解けるはずである。

「彼らは人間を食べるのである。」

第2話：ドスギアノスは偽物好きの本物志向（前書き）

生肉を引き摺り、雪山を登る青年と少女。
少女のレウス・レイアへの思い。
食べていい肉悪い肉。結論は付かない。

第2話：ドスギアノスは偽物好きの本物志向

ドスギアノスとギアノスを見分ける方法は、その特徴的なトサカにある。

翡翠色の立派なトサカを持った個体が肉食竜のリーダー、ドスギアノスである。

駆け出しハンターにとって、その素早い動きと繰り出される爪と牙はまさに強敵。

ハンターの誰もが翡翠色のトサカを恐れたほろ苦い思い出を持っていることだろう。

では、そこに横たわっている青い鳥竜の死骸はドスギアノスかギアノスか。

私はその判断をコーリンに委ねることにした。

「首がないからどちらか分からないな。」

ひきつった笑いで彼はそう答えた。

そう、雪山山頂部の狩り場に到達した私達の前に現れたのは、血塗れの雪原に横たわる首をもがれた青い鳥竜であった。

「俺はクエストリタイヤした方がいいと思う。今すぐギルドを呼ぼう。」

コーリンの弱気な表情を見るのは久しぶりだ。

彼が何を恐れているのかは、目の前の死骸の「切断面」を見れば一目瞭然である。

このような蛮行に及んだ犯人は、ハンターではない。

ましてやモンスターであるはずがない。

鳥竜種の頑丈な鱗と骨を、これほどまでに綺麗に断つことができる者。

それはアサシンである。

殺しを生業とし、略奪と戦争に加担する剣術使い。

そもそも、ハンターというものに「剣術」という概念は存在しない。

モンスターの野生的な攻撃から逃げまどい、隙あらば数人がかりで一気に叩きこむ。

ハンターには構えにも歩術にも斬撃にも型などあるはずもないのだ。

だがアサシンの持つ剣術は、武器を持った人間を相手にするために生まれた戦法。

彼らはその技を鍛えるためだけに、人を殺しモンスターを殺す。

生きるための狩り、という言葉はそこに存在しない。
そしてその中で編み出した秘術をもってして、あらゆる暴虐を尽くすのだ。
コーリンの憂いは、アサシンの稽古場に足を踏み入れてしまった私達の身の安全についてである。
私は生肉のつまったズタ袋を手離し、剣を抜いた。
鎌蟹の朱爪を用いた双剣、カーマインエッジ。
あまり道具の使い方に慣れていない私に、軽くて切れ味のある使いやすい武器としてコーリンが見立ててくれたものだ。
何しろ、コーリンには戦闘能力がない。
私はコーリンを守らねばならないのだ。
「コーリン！来るよ！」
私の野生的な勘がそう告げた。
奴が現れたのは上からである。
この雪山の真の山頂、「古龍の抜けがら」の上に潜んでいたのだ。
しかし、問題は奴の姿である。

特徴的なトサカ。

突き出た嘴。

そして私に飛びかかってくるその圧迫感。

「「ドスギアノス！？」」

だが、そのドスギアノスの跳躍は双剣を構える私に爪と牙を食いこませることにはならなかった。

ドスギアノスは私の目の前に着地。両手を地面に水平に伸ばし、ポーズを決めた。

そして、奴は甘ったるい猫撫で声で「話し出した」。

「どうですか♪決まってました？もしかしてもしかしなくてもハンターの人ですよね♪

やっぱり一人きりでいると寂しくって、会えてとっても嬉しいです。

あ！？これですか？

これはさっき生産した私のＮＥＷ防具、『ドスギアノスフェイク』です！かわいくないですか♪」

あっけに取られる私とコーリン。

ドスギアノスフェイクって、中身はどうしたんだろう。脳みそとか骨とか。

コーリンがこの電波野郎に勇気を持って話かけてみる。

「ああ、そいつはとってもキューティだ。

特にその目玉が中途半端にえぐりだされているとことかがな。

でもな、そのドスギアノスは俺達がギルドから討伐依頼を出されてたものだったんだ。

誰が獲物を狩ろうが村の平和は守れる。

だがハンターにはギルドが定めた規則ってものがある。

そしてその規則破りの犯人は大概、盗賊崩れであったり山籠りの殺人鬼だったりするわけだ。

だから、まずあんたの顔を見ないとあんたを信用できやしない。

だからとりあえず、その兜をはずしてくれないか？」

ドスギアノスの頭を模した兜、ドスギアノスフェイク。

いや、奴が被っているのはドスギアノスの頭そのものなのだが、それを奴は「ズブリ」と脱いだ。

「あぅあぅ。怖がらせてごめんなさい。私フェイクを集めるのが趣味でしてぇ。

今までにもファンゴフェイク、コンガフェイク、ガルルガフェイク、

ガノスフェイクなどなど色々と生産してきたのですよ♪」

新鮮生フェイクを外した奴の顔は、女のものであった。

ドスギアノスの頭の「中身」を適当に抉りだしただけのかぶり物をしていたのだから、彼女の頭ももちろん血だらけである。

しかし、その血で汚れ切った顔に浮かぶ、その女の表情はずいぶんと爽やかなものだった。

「そして申し遅れました。

私、剣術士のアズサと申します。よろしくお願いします♪」

顔にべっとりと付いたドスギアノスの血液をぬぐいながら、彼女は自己紹介をした。

彼女の剣術士、という言葉の意味を探りながらコーリンは答える。

「俺は細々とだが商人兼ハンターをやってるコーリン。

こっちの野性味あふれる女は俺の妻のアコだ。」

「いつから妻になったのよ。」

と文句を言いつつも、私はアズサと名乗る剣術士の警戒を怠らなかった。

彼女が背に背負うのは、おそらくギルド規則に外れた太刀である。

ドスギアノスの首をはねるほどの切れ味は圧倒的である。

それに、彼女は先程ガルルガフェイクを生産した、と自慢気に言っていた。

彼女はモンスターの中でも極めて高い硬度の外殻を持つイャンガルルガの首まではねたというのか。

「で、アズサさん。あんたのここに来た目的は？どうやら腕の立ちそうなあんたが、俺達のケチくさい獲物を横取りしに来たってわけじゃないだろう。」

コーリンがさらに詰問する。

「私が雪山にいる理由ですかぁ？うーん、あのドスギアノスに会ったのは偶然なんですよね。

暇潰しにギアノスを斬って切れ味と肉質の相対関係を調べてたら、あの子が襲いかかったきまして。

あっ、このフェイク持ってない！って思って斬っちゃっいました。ほんとラッキーです。」

彼女は本当に嬉しそうな顔でほほ笑んだ。

しかしギアノスを乱獲したら群れのボスが怒り出すことくらい想像が付くだろうに。

「それでですね。私の本来の目的というのは、リオレウスなんです！」

私はリオレウスという名前に動揺した。
デマと分かっていてもどうしても気になってしまう。
コーリンはその動揺をアズサから隠すかのように、口早に言う。
「なるほど。アズサさんもその噂を聞いてたってわけだ。
でも、残念ながらそれはデマだよ。」
その発言は私の動揺をさらに揺さぶった。
コーリンはこの怪しい女に、自分がその出まかせをばら撒いた張本人だと明かすつもりなのだろうか。
「え？どうしてでしょうか。
ちょうど今は古龍観測隊の情報によるとレイアの産卵の時期です。
レウスが遠征のため、この雪山に現れたとしてもおかしくありませんよね？
確かな目撃証言もあるはずです。」
ギアノスの群れの習性も知らなかったアズサが長期的なモンスター行動のスパンについて詳しいはずがない。
いかにも「酒場の噂好きハンターからそう聞きましたよ」といった風情だ。

「ところがだな。この噂をバラまいた阿呆は、リオレウスの『亜種』の縄張りの問題を見落とているんだよ。

レウス亜種は決まった巣を持たないと言われてる。

これは亜種が原種との関わりを極めて避けるためだ。

で、今回雪山に現れたと言われているのはレウスの『原種』。

もし本当にこの雪山に現れたとするなら、それはおそらく森丘地帯に巣を持っている個体だと考えられる。

火山地帯に生息している個体は体内の爆炎袋の温度低下にきわめて弱いからな。

でもな、森丘から雪山に遠征に来るっていうのは、この時期亜種が森丘近くまでアプトトスを求めてやって来る事実と矛盾するんだ。」

「巣にレイアを置いてはいけない、っていうことですか？」

「そう。実際は、森丘地帯のほとんどが亜種の縄張りなんだよ。

亜種の火球の威力は原種とは比較にならないほど強いからな。

原種の方が亜種の活動領域の間を縫って巣を作るんだ。

レイアが狩りを行えないこの時期は、どのレウスも必死なんだよ。

普段、レイア亜種の作った巣になんか立ち寄らない女泣かせのレウ

ス亜種も森丘で原種と睨み合いながらも狩りを続ける。

それで生態系は回っているんだよ。

それでも食糧が足りないレウスの遠征、っていうのは雪山方面ではなく、樹海の方に向かうんじゃないのかと俺は考えている。」

目撃者は森丘を追い出されたはぐれイャンクックとでも見間違えたんじゃないのか、とコーリンはさらに付け加えた。

飛行能力の低いイャンクックが雪山に現れたことの方が衝撃だろう、その嘘は無理し過ぎだ。

しかし、コーリンの話を信じ切っているように見受けられるアズサに対する、彼なりの遊びなのだろう。

「では、誰かがデマを流した、というわけですね。」

アズサが微笑みながら言う。

実は結構怒ってるんじゃないのか、この女。

「なるほど納得です。では、そのデマを流した人はまさに狼少年です♪」

「狼少年？聞いたことないな。狼っていうのはイャンガルルガのことかい？」

さっきまで教えられる側であったアズサは、今度は教える側に回れたことが嬉しいのか、喜々として語りだした。

「狼っていうのは、モスくらいの大きさの４本足の肉食獣です。モンスターが跋扈する今の時代となっては、もう絶滅したと言われています。

それについての寓話があるんですよ。それが『狼少年』です。」

「へぇ、知らなかったよ。アズサさんは結構博識なんだ。」

コーリンは聞き上手だ。

アズサはいえいえ、とだけ答え、続きを語る。

「ある村にイタズラ好きの少年がいました。

彼は大人をまどわせることが大好きで、『狼が来たぞ！』と嘘を叫びまわっては、騒ぎを起こしていました。

当時は、きっとそんな小さな肉食獣でも恐れられていたんでしょうね。

そして、少年の嘘にみんなが飽き飽きした頃に、本当に村に狼が来てしまうんです。

それに最初に気が付いた少年は、村中にそれを知らせようとしたんです。」

「で、信じてもらえないんでしょ？」

アズサと会ってからほとんど喋らなかった私が、久し振りに口を開いたため2人とも少し驚いていたようだった。

「オチを先に言われちゃいましたね♪この寓話知ってました？」

別に狼少年なんて話聞いたことがなかったが、これぐらいの予想は付く。

でも、だからといってアズサの話の腰を折ったわけではない。

この話のさらに最終的な結末まで予想できてしまったからだ。

私はそれを聞くのをなるべく先延ばしにしたかっただけだ。

「それでですね。

この狼少年は、自分が普段嘘ばかり付いていたために、誰にも信じてもらえず、守ってもらえず、狼に食べられちゃうんですよ。

そう、食べられちゃうんです。そんな小さな獣でもやっぱり人を食べるんですよね。」

人を、食べる。

私のあの森での記憶は断片的だ。

父と母が狩った獲物、私が狩った獲物。

今まで食べた肉の数を覚えている人などいるのだろうか。

私は、その数も、種類も覚えてなどいない。
しかし、コーリンは気にしているのだろう。
私が人を食う生き物の肉を食べたのか、私が人を…。
「へぇ、ためになる話だね。
だから嘘をついてはいけない、か。
それで今回のレウスのデマの話に当てはめると、その風説を流した奴はレウスに食われちまう、ってこと？」
コーリンが飄々とそんなことを言ってのける。
もしかしたら私の反応を窺うためなのかもしれない。
「レウスに食べられてしまう、ですか。
でもやっぱりそんなの可哀そうですよ。
もしその人が食べられそうになったなら、ワタシが助けてあげます♪
レウスなんてワタシの剣術にかかればチョチョイのチョイですから♪」
アズサが太刀を薙ぐポーズをしながら歌うように言った。
「俺はてっきり『ワタシが狼になります』とか言うのかと思ったぜ。

助けを呼んでも誰も守ってくれない、逃げても逃げても追って来る太刀使いのアサシンねえちゃん。想像しただけでチビっちまいそうだ。

なぁアコ？」

ひどい冗談だ、と私は思った。

コーリンやっぱり君こそが狼少年だよ。

「さっきアサシンって言いました？」

アズサの様子がおかしい。

さっきまでの明るい表情が露と消え、今にも私とコーリンの首を刈っ斬りそうな形相をしている。

「ワタシはアサシンではないのです。

剣術士なのです。

そこんとこを間違えられると、あなた達『も』ニンゲンフェイクにしちゃいますよ？」

ニンゲンフェイク。

人間の顔を模した頭装備。

素材は人間の頭殻と皮。

いやアズサならもしかすると、生の人間の頭部を中身を抉り出して被るのかもしれない。

そんなおぞましい光景が思い浮かんだのか、コーリンが珍しく慌てている。

「あ…アズサさんも怖いこと言うなぁ！

ニンゲンフェイクだなんて。アコの顔が可愛過ぎるから、とって置きたい気持ち分かるけどさ。

こいつ顔はいいけど乳もねぇし、軽く筋肉質だからそこんとこが残念なんだよ。

アズサさんはアサシンなんかじゃないって分かってるよ。俺も、アコも。

ただそれに匹敵するだけの剣の実力がある、ってアコが言うもんだから、つい調子に乗って例えてみただけなんだぜ！」

別に私そんなこと言ってないけれど。しかも体が残念って。

しかし、アズサはニンゲンフェイクを本当に作ったことがあるのだろうか。

だとすると、今のアズサの顔は偽物…？

あの潤いのある唇とまだ血が拭き取り切れてないスラリと高い鼻、ふくらみのある頬。目玉はさすがに本物か。

しゃべり方の割には顔だけ大人びて見えないこともない。
アズサは、コーリンの主張を聞きいれ、分かればいいのです、と殺気を消した。
「ねぇ、コーリン。もうそろそろ…。」
彼の装備をそっとつかみ、撤退の提案を持ち出す。
「ああ、そうだな。ドスギアノス討伐は失敗したとギルドアイルーに報告しよう。
孤高の剣術士、アズサさんをギルド規程違反の悪者にするわけにはいかないもんな。
偶然なんだし。」
「いやはやありがとうございます。」
アズサは続いて、もうギルドに追われるのはコリゴリですから、とぼそりと呟いた。
しかし、コーリンは少し後悔があるように思えた。
「でもなぁ、クエストリタイアになっちまうんだよなぁ。折角これだけ集めたのに、ギルドに没収か…。」
コーリンはズタ袋を名残惜しそうに見つめる。
どうせギルドに見つからないよう隠して持ち帰る癖に。

「その中身は何が入ってるんですか？」

「「生肉」」

と2人で声を揃えてしまう。

しかし、雪山だからこそこれだけの生肉を腐らせずに持つことができるのだ。

砂漠のアプケロスの肉ではそうはいかない。

そこのドスギアノスの死体も、まだ新鮮そのものだ。

血の匂いはきついけれど。

雪山。大量の生肉。血の匂い。

雪山。大量の生肉。血の匂い。

雪山。大量の生肉。血の匂い。

……。

……。

…。

3人とも沈黙している。私と同じことに気が付いたのではないだろうか。

空から迫る気配。

突然の轟き。

絶対強者ティガレックスは私達3人の前に瞬く間に現れた。

第3話：狩人狩人ティガレックス・序（前書き）

フェイクコレクター剣術士アズサと出会うアコとコーリン。
コーリンはアズサにまた嘘をついた。
狼少年とはまさに彼のことである。
そして突然の轟音。
絶対強者ティガレックス、ここに現る。

第3話：狩人狩人ティガレックス・序

轟竜ティガレックスは雪山に生息するモンスターの中でも極めて凶暴である。

肉と血の匂いを好み、傷付いた者から順に始末する。

ティガとの戦闘においては、怪我をしたものが囮にされることすらあるのだ。

そこまで、奴を狩ることは命がけなのだ。

私はコーリンと組んでから、2人で奴を狩ったことは1度もなかった。

逃げるのが先なのである。

だから私とコーリン、アズサの3人は奴の姿を見た瞬間、先を争うように山頂部の洞穴に駆け込んだ。

「あんな奴がいるなんて聞いてないのですよ！」

口を膨らませて怒るアズサ。

「いや、ティガはいつでも雪山にいる。

俺達ハンターは奴から隠れるように狩りをしているだけだ。

氷結晶を掘りに行っただけのハンターがティガに襲われそのまま

帰らなかった、という話はよく聞く。」

私達の隠れている洞穴は、古龍の抜け殻の上に登るためにハンターが掘ったものだ。

先に進んでもティガがいる雪原に飛び降りるしかない。

逃げ道は塞がれている。

しかし、その穴の大きさからティガが侵入して来ることはまずないだろう。

それでもティガは、さっきから洞穴の入り口付近に向けて突進を繰り返している。

穴の内部に轟音が鳴り響く。

「その生肉、なんで持ってきたのよ！」

私はコーリンの大きな荷物を指さして非難する。

「それを置いてくればきっとティガが生肉に気を取られているうちに逃げられたはずだわ。

コーリンの欲張り！！」

「しょうがないだろうアコ。

商人の性ってもんがある。

しかしティガはなんでドスギアノスの死体に向かわないんだ？」

「それは…ドスギアノスの肉がおいしくないからよ。」

私は、あの血の匂いを嗅いで、臭みの強いギアノスの肉を確かに食べた記憶を思い出していた。

それをコーリンにすぐに言わなかったは、彼に嫌われるのを恐れたからだ。

人を食う生き物を食べた人間として。

彼はこの緊急事態故に、気にしないフリをしている。

「これはアイツと戦わなきゃならないようですね。」

アズサが覚悟を決めた表情で口を開いた。

「アコさん。コーリンくん。武装を見せて下さい。」

私は、先程アズサに向けようとしたカーマインエッジを見せる。

しかしコーリンは…。

「コーリンくん…これは何ですか！！」

「いや片手剣なんだけど…。」

「違うでしょう！これはただの剥ぎ取り用ナイフです！

あなたはこんなものしか持たずに雪山に来たのですか！」

アズサが凄い剣幕で捲し立てる。

コーリンが対モンスター用の武器を持っていない理由を説明しよう。

それは、彼がギルドを欺くためのトリックを用いているからである。

もともとこんな量の生肉を持ち帰るのはギルド規則に違反しているのだ。

それを彼は、自分の使用武器をガンランスとして登録することで切り抜けている。

狩り場からの素材の持ち込み、持ち出しはその数量によって厳しくチェックされている。

しかし、「武器」については、狩り場への行来きに用いる気球での重量制限を除けばノーチェックである。

その穴を突き、極めて重量の大きいガンランスを持ち込むフリをして、実際は何の武器も持たない。

そして大量の素材を「ガンランス」として持ち帰るのだ。

彼は目的のためならギルドを欺くことなんて気にもしやしない。

「じゃあもういいです。私1人で戦います。

私の武器はこの太刀『鉄刀【巫女舞】』を使って1人で死合うことに慣れてますから。

コーリンくんにアコさんを置いて1人で逃げろ、と言っても聞かないのでしょう？」

いやコーリンは1人でも余裕で逃げる、とちょっと失礼なことを思いつつ、彼女の武器をしかと見る。

美術品のように美しく神秘的な波紋と、彼女の身の丈ほどもありそうな長さ。

ギルドから認められている武器ではもちろんないだろう。

「恩に着るぜ。

あんたの勇士は墓に入るまで忘れない。」

「そんな私が死ぬようなこと言わないでください！」

アズサが顔を赤らめて怒る。

「でもさっきから穴の入口に突進してきてるティガからどうやって逃げるというの？

穴から出た瞬間に、ティガの口の中だった、なんて私は嫌よ。」

それはですね…、とアズサは作戦があるかのように言う。

彼女は携帯鞄を弄り、1個の玉を取りだした。

「じゃーん♪閃光玉です♪

もし夜営をするとなったときに必要かと思って持ってましたぁ。」

彼女はこのまま泊まり込みでレウスを狩るつもりだったのだろうか。

こんなモンスターだらけの雪山でキャンプなど、命知らずにもほどがある。

「私が先に出てこれを投げるので、ティガが目を回している隙に2人とも逃げてください。」

なるほど。分かりやすい作戦である。

だが1つの懸念すべき点がある。

「コーリン！その生肉袋は絶対置いて行ってね。」

コーリンがギクッとしたような表情で私を見つめ返す。

「分かってるよ！もちろん置いていくさ。

自分の命を捨ててまで、金なんて欲しくねえよ。」

まぁ、大丈夫そうかな。

ティガの突進も大分収まってきた。

もうこの中には入れない、と理解したようだ。

アズサが意志を決めたように言う。

「さぁ、行きますか♪

3人とも無事に雪山を出ることができたなら、次はポッケ村の酒場であまーい蜂蜜酒でも一緒に飲みましょうね♪」

「ああそうだな。冷えた麦酒もあればなおいいぜ。」

「私は肉さえ食べられれば何でも。」

私とコーリンは、無事に逃げ延びることができるのだろうか。

初めて会った時、警戒心を露わに接していたしていたアズサも、今となっては生き延びてほしいとまで考えている。

狩る者と狩られる者。

私達とモンスターの関係は、時と場合によって容易に入れ替わるのだ。

次会う時は、温かな団欒の中で。

そんなハンターの常套句を、この危機的状況の中で今やっと私は理解できたのかもしれない。

帰ろう。村へ。

しかし、この時の私達はこの後起こる血みどろの死闘を予想だにしていなかった。

本当の狩人、それはモンスターのことだと私は痛感することになるだろう。

生れながらのハンターモンスター、轟竜ティガレックス。

狩人は　危機に瀕した時　本当の牙を剥く。

第４話：狩人狩人ティガレックス・破（前書き）

雪山でティガレックスに出会うアコ、コーリン、そしてアズサ。
洞穴の中に逃げ込んで緊急会議。
閃光玉を喰らわせアズサが食い止めてくれるらしい。
逃げろ！アコ、コーリン！

第４話：狩人狩人ティガレックス・破

「目をどじてくださいっ！」

噛んだ。

先に洞穴を飛び出したアズサの叫び声である。
位置関係として、洞穴近くから、コーリン、私、アズサそしてティガレックスの順に並んでいる。
そして、アズサがティガの目の前で閃光玉が炸裂する様に計算して投擲を行ったのがこの場面なのである。
しかし、アズサはその言葉通り、「ドジ」った。

「ひゃあ！目が…目がぁああ！！」

アズサの叫び声と同時に目を瞑ったコーリンと私が、目を開けた時に広がっていた光景。
それは、視覚を奪われ混乱するティガと、自分が投げた閃光玉に自分で目を回すアズサであった。
おそらくティガの位置を意識するあまり、自分の目を塞がずに閃光を見てしまったのだろう。

「ワタシは大丈夫です！早く２人とも逃げてください！」

アズサが叫ぶ。
私は困惑しながらも後ろのコーリンに振り返った。
この予想外の状況に対する意見を求めるためである。
しかし、そこにいるはずの彼の姿が見えない。

「アコ！お前も早く逃げろ！」

遠くからコーリンの声がする。
そう、彼はアズサが閃光玉を投げようとした瞬間から既に駆け出していたのだ。
アズサが閃光をティガに食らわしてくれると信じた上での判断、と言えば聞こえはいいのだろうが、彼の事だから、もし失敗したとしてもティガはより近いアズサに襲いかかる、と踏んだ上であろう。
しかも私を置いてってるし。恩知らずめ。
私は混乱するティガの方に目をやる。
禍々しい黄色と青のまだら模様の外殻。
私のマフモフなんか軽く一裂きで破られそうな前爪。
他者を狩るため、食うために進化した重厚な牙。
私ももしも生まれ変わるならあんな風に生まれたい、と思ってしまうほど、その出で立ちは「狩り」に特化していた。

「ほんとに大丈夫？」

私はアズサに問う。
彼女は目を泳がせながら鉄刀【巫女舞】を構える。

「私を誰だと思ってるんですか。
フェイクマスター剣術士のアズサですよ？
私があんな立派な頭殻の持ち主をフェイクにしないなんてあり得ません。」

彼女が言っているのは強がりである。
太刀を構えてはいるが、前に進めない。
一歩進もうとしては、雪に足を取られつまずいている。
おそらくここが白銀の雪原であることも影響して、今彼女の視界は白一色、ホワイトアウトの状態にあるのだろう。

「私が狩るよ。」
「えっ？」

私はこのような巨大で強大なモンスターを前に昂ぶっていた。
奴のような最強の肉体を持って生まれ持った生き物が勝つのか、私のように狩りを求めて生き続ける軟弱な肉体しかない生き物が勝つのか。
そこに決着を付けるのは、一対一、サシの勝負である。
私はカーマインエッジを構えると同時に、駆けだした。
奴は動きを止める。
私の接近に気付いたのだろうか。
私の狙いは最も硬度の弱そうな眼と鼻の間の部分。
アズサには悪いが、奴の顔をグチャグチャにさせてもらう。
対の短剣を同時に振り上げる私。

「刺し込めええええ！！」

そのまま地を蹴りティガの顔に剣を突き立てる。
という、乱暴な攻撃は、思い通りにはいかなかった。
モンスターは人間とは違う。
奴の望んでいるのは殺し合いではない。ただの食糧調達だ。
さっきまで私に顔を向けて下げていたティガは、首を高くもたげる。
閃光玉を喰らって失明状態にあるはずの奴が何を見ているのか。
いや、これは「嗅いでいる」のだ。
剣をすかされた私は、素早く構えを変える。
そして剣を向ける私を無視した方向に、奴は恐ろしい速度で突進を始めた。
私はその先に目を向ける。
そこで下山用の山道に向けて走っていたのは、そう、コーリンであ

る。

「コーリンっっ！！！」

思い切り叫び彼を振り向かせる。
驚いて振り返るコーリンの唖然とした表情。
私は走った。だがティガに追いつけるはずもない。
武器を持たぬコーリンは、為すすべもなく……
ティガの牙が肉を裂いた。

そして、奴は「肉」に覆いかぶさり、牙を大きく見せつけて、かぶりついた。
泥を混ぜるような音がする。
轟音と共に現れ、雪崩のように暴れ回るティガの食事風景は、ずいぶんと繊細で静かなものだった。
奴はコーリンを、食っている。

ティガの牙が彼の身を裂くまでの数秒の間、私は場違いにもコーリンとの狩りの日々を思い出していた。
毎日のように狩り場に向かった私とコーリン。
殺すのは私、剥ぎ取るのはコーリン。
私の目的は食事としての肉であり、彼の目的は金のための肉である。
彼は言った「肉は嫌いなんだ」と。
「なんで？」と聞いたら、嘘っぽい笑みで「宗教上の理由さ」と答えたっけ。
しかし、彼は金のために肉を剥ぎ取る。
今日はポポの肉を袋一杯持ち帰るつもりだった。
そう、ポポの肉を。
彼が真っ先にティガに襲われた理由。

きっと、それは彼が少しでも金になれば、とマフモフのポケットに、携帯鞄に、ポポの肉を入れていたからではないだろうか。
欲深いコーリンならば、あり得ることである。
私は小声で、バカ、と言いながら、ティガに走り込む。
辺りの雪にはコーリンの血が飛び散っている。

「よくもコーリンを！！！！」

私がティガを睨み、剣を突き刺そうとする。

「待て…逃げろ…。アコ。」

しかし、コーリンの声が私を引き留める。
ティガに覆いかぶされその姿は見えないが、確かにコーリンは生きているようだ。
助けなければ、という考えより先に、生きながらティガに喰われているコーリンの姿が目に浮かび、泣きそうだった。
ついに彼は、「狩られるモノ」に成り下がったのである。

「だから逃げろって言ってるだろ！！！」

しかし、コーリンは喰われかけだというのに、やけに元気な声である。
そして、ティガの様子がおかしい。
体の感覚が効かない、といったように、口に入れた生肉を咀嚼せず、ビクビクと痙攣している。
これは……

「シビレ罠を奴の真下に仕掛けた。」

ティガの下から這い出しながら、コーリンが言う。
脇腹から血が浸み出しているが、命に別条はないようだ。
「あいつが口に入れているのはポポの肉。
俺はあいつの突進を食らうと同時に、懐に入れた生肉を捨てて、あいつの下に潜り込んだ。
ポポの肉の匂いに釣られていたあいつは、やはり俺の体よりも生肉の方に興味を持ったぜ。
で、俺はあいつが生肉を貪ってる内に麻痺罠を仕掛けたってわけ。
短時間しかなかったけど、『罠師』の俺にとっちゃ余裕だったね。」

あっけに取られる私をよそに彼は言った。

「で、なんで俺がお前に逃げろ、って言ったかっていうとだな…。」
彼は麻痺状態で痙攣するティガに、もう一噛みだろ、と呟いきながら、奴の足を軽く蹴った。
生肉を咥えたまま身動きのとれないティガが、足からの刺激に反応して顎を固く閉じた。

突然、響き渡る爆発音。
コーリンの背中に爆風を防いでもらいながら、私は一瞬目を瞑り、息を止める。
そして爆風が止むとそこにあったのは、とんでもないティガの姿だった。
顎を限界までダラリと開け、辺りに肉の焦げた匂いが漂わせながら怯むティガ。
なぜならば、爆発は奴の口内から起こったのだ。

「生肉爆弾だ。」

と格好付けたように言うコーリンは、そのまま膝から崩れ落ちる。
「あとは私にまかせて。コーリンは寝てていいから。」
そう囁いて、私はコーリンの肩を撫でた。
彼はよろめきながらティガから離れ、そこで倒れた。
単純に貧血であることを願いつつ、私は少しほっとしていた。
ティガを相手にするなら、いつものように手は抜けない。
私の本気。それはコーリンにはとても見せることはできないものだ。
幼少時の血だらけの日常の中、私の中に生まれた狂気。
「狩る」ためなら、狂ってしまってもいい。
ただ、ただ、目の前の獲物を殺すために。
私は鬼になる。モンスターになる。

ティガが、動き出す。
もう閃光も麻痺も体から抜け去ったようだ。
奴は自分の体を確かめるように、大きくバックステップし、吠えた。
響き渡る怒りの声。外殻のまだら模様に赤い筋が浮き出している。
「あああああああああああああああああ！！！！！！！」

私はティガに向かって吠えた。
その声が自分の脳を体を赤く染める。
私は鬼人化した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8940g/

モンスターハンター×ハンターモンスター

2010年10月9日17時47分発行